シャークハンター

己の身体は己のものか？

おいがつお

I

一匹のシラスのような、細く白い三日月。

それは、夜なお明るいウエノシティを照らすライトとしては、いささか小さすぎるものであった。

ウエノシティのそこかしこにそびえるビルの明かりは、深夜十二時を回ろうとするこの時間ですら、消えることはない。

上空の月は見ていないだろう。そのようなビルの中のことなど。

たとえそこで、二体のサメが相対していたとしても。

とはいえ、つい先ほどまでは、この一階の受付ホールにサメは一体しかいなかった。

伊達巻きのような大きな飾りを背中に据え付け、シャークスーツを身に着けた男の名は、ツリーハウス。

シャークスーツを纏って変身している。つまり、彼がシャークノイド……かつて絶滅したサメの魂たるシャーク因子を捕食した超人であることは一目瞭然だ。

「遅い」

そんなツリーハウスはいらだっていた。

ホールの時計を見上げると、時刻は十一時半。

仕事を任せたシャークノイドの部下、スタントマンとナップの二体が、いつまでも返事を残さず帰ってこないのだ。

今回の案件は、四階の四〇八号室で裏金を受け取ること。

一カ月に一回、定期的に行われる取引だ。

まっとうな店や事務所が、まだ参入してきていないこのビルは、闇取引の穴場スポットであった。今回も人の少ない日を選んで訪れたのである。

そろそろ仕事にも慣れてきた頃合いだろうと、ためしに自分抜きで二人を行かせてみたが、今回に限って首尾が悪すぎる。

こちらから電話をかけても、一向に出る様子もない。

『あっと目に効く』

『山椒よりも辛い』

眉間にしわを寄せ、ギュッと目をつむる広告の女は、ツリーハウスの剣幕に恐れおののいているかのようであった。

「あいつらめ」

規則正しく並んだソファーの一つに座っていた焦茶色のシャークノイドが、いよいよしびれを切らして立ち上る。

これ以上待ってもしょうがない。一つ、こちらから出

向くしかない。その後で、二人をぶん殴ってやろう。
自分一人しかいない受付フロアで、ツリーハウスは指を鳴らした。
「……ん？」
ホールの東側にある、エレベーターのランプが動き出したのが見える。
〈4〉……〈3〉……〈2〉……。
ランプが点灯している数字は、徐々に小さくなっていく。
「やっと終わったか」
ツリーハウスはエレベーターの扉前へと向かう。
開幕一番、予定時刻を大幅に過ぎた二人へ拳を振るうためだ。
前時代的にもほどがある教育方法だが、暗黒サメ組織であるオオナミ・コーポレーション内では、それが効果的と判断されれば、咎められることはない。
ギュ、ギュ、とツリーハウスが拳を握る。
「……」
エレベーターの前で、ツリーハウスの表情がこわばった。
それは、怒りの形相ではない。
「……！」
警戒。そこからくる緊張。
高いシャーク危機察知力で、ツリーハウスはエレベーター前から飛びのいた。

バガン！

鈍い音と共に、エレベーターの扉が吹き飛ぶ。
「……」
そこにいたのは、全身から殺気を放つ、青銀のシャークスーツを着たシャークノイド。
なんということであろうか！　エレベーターの中からサメが現れたのだ！
「……貴様がツリーハウスか。スタントマンとナップの証言は正しかったようだな」
およそ話が通用するとは思えぬ登場の仕方をした青銀のサメであったが、なんとそいつはしゃべった。
部下二人の名前を告げている。その末路を示唆するかのように。
「……二人に会ったのか」
「そうだ。俺が狩った。狩る前に尋問し、貴様が一階にいることを聞き出した」
ゆっくりと、青銀のシャークノイドはエレベーターから出てくる。
彼らの連絡が途絶えたのは、こいつに殺されたからなのだろう。
「安心しろ、ツリーハウス。貴様もすぐに二人のもとへ

送ってやる」
想定外の事態。ではある。
だが、ツリーハウスは冷静であった。
「……何者だ？」
彼の問いに、青銀のシャークノイドはこう答えた。
「我が名はシャークハンター――サメを狩る者だ」

Ⅱ

探偵。ウエノシティに事務所をかまえる、冨士宮甲呀（ふじみやこうが）の職業だ。
事務所は二階建てのビルである。一階には〈Cafe 癒され〉の看板が店先に掲げられており……つまり甲呀の探偵事務所は二階だ。
二階には訪れた客を迎える応接室、住居スペース、それから板張りの運動場があった。
運動場は大した広さではなく、木人椿（もくじんつばき）とピッチングマシーン程度のものしかない、簡素なものである。
そして、運動場の中心で座禅を組む、一人の青年あり。
「……」
厳しい修練前の大事な、精神集中の時間であった。
これより青年が行うのは、古代武術カンブリア殺法の修練である。
しかし運動場にて初めにやることは、まず座禅。
古代武術カンブリア殺法に精通していないうちは、訓練前の精神安定は不可欠なのだ。
「最初は座学からだ、海峙」
師匠である甲呀に教えを請（こ）い、青年が――清水海峙（しみずかいち）が初めに習ったことは、古代武術カンブリア殺法の基礎知識であった。
「古代武術カンブリア殺法とは、自身の内なるシャークオーラをカンブリアオーラに練成し、戦う古武術だ」
サンドバッグへと近づく甲呀の後ろに、海峙も続く。
「カンブリア殺法の技は、カンブリアオーラを込めて撃つことを前提にしている」
甲呀はサンドバッグの前で立ち止まる。
「シャークオーラの変換っていうワンアクションを伴（ともな）う手間を上回る威力が、カンブリア殺法にはある。例えばだ」
彼はポンポンとサンドバッグを叩き、そしてこれを殴った。
ギシ……
揺れるサンドバッグ。
「今のが、普通にシャークオーラを込めたパンチ」
わずかに揺れるサンドバッグを止めた甲呀が、海峙へと振り返る。

「じゃあ次、俺が今込めたものと同じ量のシャークオーラを、カンブリアオーラに変換したパンチだ」
サンドバッグに向き直った甲呀は、再びこれを殴った。

ミシィ……！

鎖がきしむ音と共に、大きく揺れるサンドバッグ。
最初の拳と比べると、相当に堪えそうな一発だ。
「いちおうシャークオーラとカンブリアオーラの違いを見せはしたが……まあ感覚でしかわからねえよな」
ゆらゆらと揺れ続けるサンドバッグを、甲呀が止めた。
「まあとにかくだ。シャークオーラをカンブリアオーラに練成し、技を放つとその威力が増す。これを利用した武術ってのが、古代武術カンブリア殺法なわけだな」
「なるほど」
海峙は生真面目な顔で一声。
「だから、カンブリアオーラ変換の技術は、古代武術カンブリア殺法の基礎基本になる。ところが……こいつがなかなか面倒だ」
「カンブリアオーラの練成は、やはり難しいのですか？」
「いや、練成自体は、海峙もすぐできるようになるだろう。適切な量のシャークオーラだけを変換し、技を使うのが面倒なんだ」
「……？」

師匠の言葉に、海峙が首をひねる。
「海峙、シャークオーラが減るとどうなる？」
「……身体能力が衰えます」
「大体合ってる。シャークオーラとは、生命力であり、力であり、スタミナみたいなものでもある。シャークノイドになった海峙なら、肌で理解できるな？」
「はい」
首を縦に振る海峙。
自分はサメ。シャークノイド。血と汗とフカヒレにまみれた狩人。
「お前や俺を含め、シャークノイドは、息をするようにシャークオーラを使いこなせる。だが、カンブリアオーラは違う」
そうだな、とあごをなでる甲呀。
「口の広いバケツに、並々と水が入っていたとする。それこそ、ちょっと揺らしたくらいでこぼれるほどの水だ。このバケツから、必要な量だけの水を、ひしゃくやカップを使わずに取れ……って言われたら、難しいだろ」
「はい」
「カンブリアオーラへの変換の難しさの感覚は、バケツの例と似たようなもんだ。必要な分だけカンブリアオーラを使いたいのに、加減を間違えるとエネルギーのムダがでる」
本来、古代武術カンブリア殺法は、少ないリソースで

大きな力を生み出すことを主眼に置いた武術である。
古代武術カンブリア殺法の始祖たるアノマロカリス・シャークは、戦場のただなかで三日三晩戦い続け、なおその勢いは衰えず、敵に絶望を与えたとされる。
ところが、使い手のオーラ変換技術によっては、その利点を捨てるどころか、かえってエネルギー消費が激しく息切れの早い、自殺めいた戦闘スタイルになってしまうのだ。
「だから、カンブリア殺法の基本は、カンブリアオーラの変換。それに付随して、必要な量だけのオーラを引き出す技術。わかったか？」
「はい」
それから、カンブリアオーラ練成の修練が始まった。
初めのうちは、何の技も……それこそただのパンチやキックなども使わず……ただただオーラを変換する練習を繰り返した。
一日目の修行の時は、三十分とたたずに海峙の疲労は限界を迎えた。
シャークオーラの使い過ぎが原因である。
シャークオーラとは、シャークノイドを超人たらしめる力の根幹にして、生命の源。それを際限なくカンブリアオーラに変換してしまい、あっという間に体力が底をついたのだ。
いくらバケツにたくさんの水が入っていても、ひっくり返せば一瞬で中身は空となる。
どのくらいの角度で傾ければ、バケツの水は長持ちするのか。それを体で覚える必要があった。
精神を落ち着かせ、命の泉を見つめる。体内のシャークオーラを理解する。
カンブリア殺法の技を師匠に教えてもらったのは、カンブリアオーラの変換に十分慣れてからのことだ。
「筋がいいな。オーラ練成を覚えるのに、俺はもう少し時間がかかると思っていたぞ」
そんな言葉と共に、甲呀が最初に示した技は、遠距離技のアノマロ・シュート。カンブリアオーラを、エネルギー波として撃ちだす基本技である。
「基本技と侮るなよ。サッと使える飛び道具を持ってるだけで、戦闘の立ち回りは格段に楽になるんだからな」
座禅を組み、ただ心をオーラに集中していればよかった時と違い、技を撃つことも意識しながらのカンブリアオーラ練成の難易度は、大きく上昇していた。
アノマロ・シュートを数発撃っただけで、海峙の息切れが始まる。
「……ま、最初はそんなもんだ。気を落とすなよ」
「はい」
初日は早急に疲労困憊。
脂汗を拭いた後のアイスクリームが、なんとうまかったことか。

古代武術カンブリア殺法の会得は、実に厳しい。
うっかりシャークオーラの変換量を間違えると、鼻血が出そうになる。
夢中になり、意識が飛びかけたことも一度や二度ではない。
それでも、海峙は決して折れることはなかった。
すべては、サメを狩るため。
大切なものをことごとく喰らったサメを狩るため。
しかし、ただサメを狩るだけなら、古代武術カンブリア殺法を習熟しなくてもよいのだろう。
そう。別の方法は、ある。
《……海峙……海峙よ……》
まぶたを閉じ、心を平静に保たんとする海峙に呼びかける声。
《なぜ心のサメを否定する？》
心臓の内側から反響するような声。
《……イワシか》
海峙は吐き捨てるように、心の中で声の主に返した。
彼の宿したシャーク因子の正体は、イワシ・シャーク。肉体の消滅したシャーク因子となったにもかかわらず、宿主と対話が可能な、きわめて珍しいサメであった。
《古代武術カンブリア殺法なんぞに頼らずとも、我々の力があれば、簡単にサメを狩ることができるぞ、海峙》
時折、イワシは海峙に語りかけてくる。タイミングは不明だが、「波長」が合う瞬間があるらしい。
そういった時に、決まってイワシは、海峙を深い海の底へといざなうのであった。
《早くイワシになれ、海峙。我々と一つになるのだ》
《黙れ、イワシ》
海峙は暗黒のイワシを突っぱねた。
《俺はイワシにはならん。俺は清水海峙だ》
《強情なヤツよ》
フン、イワシが息を吐く。
精神修業の目的は、古代武術カンブリア殺法を巧みに操るためだけではない。
己の内側からささやきかける、イワシの殺意に飲み込まれないためでもあった。
イワシ・シャークは邪悪だ。他のサメを狩ることができるのならば、その他一切の者……周りの命のことなど、まるで意に介さぬサメであった。
イワシは、海峙のサメへの憎しみを増幅させ、彼の精神を乗っ取り、その体を完全に我が物とせんと企んでいる。
精神を鍛えることは、自分が自分であり続けるために不可欠なことであった。
《第一、貴様はサメを狩りたいのであろう？　あのアノマロカリス・シャーク因子捕食者も、サメだ》
《師匠は別だ。俺の恩人なのだ……お前にとっては忌々

しい存在だろうが、な》
《己の都合で例外判定か。自分勝手よな、海峙！》
《お前にだけは言われたくはない》
これ以上、イワシと話しても無意味だ。
《去れ、イワシ。俺はイワシにならん》
《……カカカ。よい、よい。まだ機会はある》
心の底へと沈んでゆく、イワシの声。
《今は好きなだけ否定するがよい……》
「……」
乱されてはいけない。
俺は、清水海峙としてサメを狩るのだ。

「割とサマになってきたな」
師匠との組み手が終わり、呼吸を整える海峙に向かって、甲呀（こうが）は言った。
修練の最後には、冨士宮（ふじみや）甲呀と組み手を行うのが通例であった。費やす時間こそ修練全体の中では短いが、みっしりとした密度を誇る十五分間である。
「まだまだ出力が不安定な部分はあるが、すぐにぶっ倒れることもなくなってきた」
シャークオーラを変換しながら戦闘を継続するのは、慣れていないと困難を極める。
カンブリア殺法初級者であれば、何の攻撃を受けていなくとも、二分足らずでフラフラになってしまうことも多い。
実際、海峙（かいじ）も似たようなものであったが、今やシャークオーラ切れによる戦闘不能を起こすこともなく、組み手を続けることができていた。
「特に、攻めに転じているときはいいな。だいぶオーラのコントロールがうまくなっている」
「ありがとうございます」
師匠の指摘通りと言うべきか、アノマロ・シュート、ツイン・チョップなど、カンブリア殺法を学び始めた初期から反復練習した技は、なかなか板についてきた。
海峙自身も、そう手ごたえを感じていた。
「ただ……気になるのは回避動作だな」
「やはりそうですか」
しかし、自身の足りないと感じる部分も、また師匠の見極め通りであった。
「エビゾリをする時、オーラ変換にムダが多い」
太古味あふれる動作で相手の攻撃をかわす、古代武術カンブリア殺法の回避技、エビゾリ。体をくの字に曲げる、エビ反りと呼ばれる一般的な動作とは、名前が同じだけの、まったく別のそれである。
「エビゾリは体表にカンブリアオーラを張り巡らせることで、感覚を研ぎ澄ますことがキモなんだが……エビゾ

リに使用する量以上のカンブリアオーラが、空気中に霧散してしまっているんだな、海峙は」
それすなわち、命の源たるシャークオーラのムダ遣いをしているということだ。これでは、下手に回避をするより、敵の攻撃をそのまま喰らった方がマシだったということになりかねない。
「次の課題だな。回避行動を重点的に鍛えていこう」
「はい」
まだ、自分には足りないものが多い。
これから戦うサメたちにも、ささやきかけるイワシにも勝たねばならぬ。
精進あるのみ。
海峙は生真面目な男であった。
「さぁ、今回の修練はここまでだ」
甲呀の言葉で、彼は我に返る。
「先に風呂入ってこい、海峙。ココア入れておいてやる」
冨士宮探偵事務所には、ココアが常備してある。
事務所所長である甲呀の好物だからであった。

Ⅲ

清水海峙――シャークハンターは、一体のシャークノイドと向かい合っていた。
頭部から額にかけて、二本の黒い縞模様が入った、焦茶色のシャークスーツを着たシャークノイドだ。
スーツの胸元には〈Tree house〉と名が刻まれており、先ほど狩ったサメたちの言葉にウソはなかったことがうかがえる。
「ツリーハウスさんは強いぞ！」
シャークハンターに狩られる直前、ナップは叫んだ。
相方のスタントマンは、すでにアンモニア臭を上げて蒸発している。
尋問をするならば一人で事足りるため、スタントマンは早々にシャークハンターにとどめを刺されたのだ。
「お前にツリーハウスさんが殺せるものか」
「どれだけの実力の持ち主であろうと関係ない。サメは狩る」
化け物は淡々と言い放つ。
「ナップ。お前も例外ではない。俺の片手間で殺せるほどの稚魚だろうが狩る」
そうして、シャークハンターは二人のサメを狩った。
現在、三人目の標的を目の前に定めたわけである。
「……シャークハンター」

ツリーハウスがつぶやく。
「サメを殺して回っているおかしなヤツがいると聞いたことはあるが」
オオナミ・コーポレーションは大組織だ。数多のシャークノイドを抱える暗黒サメ組織に属していれば、シャークハンターのウワサも、一度や二度は耳に入ってくる。
「貴様がそうか」
「その通りだ」
隠すこともなく、シャークハンターは言った。
「そして、お前も俺に殺されるサメの一体となるのだ！」
シャークハンターがツリーハウス目がけて飛び込む。
闇のビルの中で、サメ同士の人知を超えた戦いが幕を開けたのだ！
それぞれの両手で手刀を形作り、敵の胸元へと振り下ろすシャークハンター。
何度も練習を重ねて身に着けた古代武術カンブリア殺法の基本技、ツイン・チョップである。
「様子見の一撃か」
ツリーハウスは難なくこれを回避。
機敏！　まずもって直撃を期待していなかった攻撃だったが、どうやら敵は予想以上に油断ならぬ身のこなしをしているようだ。
たしかにスタントマンとナップとは、比べ物にならない相手だろう。
ツリーハウスが攻撃に転じた。両手を振り下ろしたシャークハンターに対しての右ストレート。
顔面ががら空きだ！
だが、シャークハンターは首を傾け、攻撃の軌道から逃れる。
直後。
「ぐうぅッ！」
シャークハンターの脇腹に痛みが走った。
ツリーハウスの左手が、彼の体を捉えていたのだ。
「先制攻撃を仕掛けておきながら、先にダメージをもらった気分はどうだ？」
挑発的な言葉を投げながらも、ツリーハウスは手をゆるめない。空を切った右腕を、鞭のようにしならせた。
態勢を整えんとするシャークハンターに、慈悲なく襲いかかる右腕。
すんでのところで、シャークハンターが攻撃をガード。
とはいえ勢いは殺しきれない。無防備に受けることは避けられたが、このままの状態でいればジリ貧だ。
一度間合いのできた、ここで立て直しを図るべし。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
カンブリアシャウト――古代武術カンブリア殺法の技を行使するときに放つシャウトだ――と共に、シャークハンターが右手を伸ばす。
カンブリアオーラをエネルギー波として射出する、ア

ノマロ・シュート！
「飛び道具か！」
対するツリーハウスは、背中に左手を伸ばす。
彼のシャークスーツの背中についていた、伊達巻きの装飾はただの装飾ではなかった。
シマリスのしっぽめかした模様が立派なその装飾を、ツリーハウスは左手に装着し、これをもってアノマロ・シュートを受け止めたのだ。
バックラー、防具か。ならば。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
シャークハンターはアノマロ・シュートの追撃を行う。
対抗すべく、左腕を前に掲げながら前進するツリーハウス。
ここであえて狙うは、防御を固めた左腕！
アノマロ・シュートを撃つ手を不意に止めたシャークハンターが、
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
代わりにツイン・チョップを振り下ろした。
近接技のツイン・チョップの方が、アノマロ・シュートよりも当てた時の威力は大きい。
ツリーハウスのバックラーを装着した腕に、突如として迫る衝撃。
すかさずシャークハンターが、敵に蹴りを叩き込む。
見事に命中！　ツリーハウスに初めてそれらしい一打を当てることができた。
「やるな」
ツリーハウスが後方へステップ。手早くバックラーをしまいつつ、ソファーに飛び乗る。
そしてさらに跳躍！　そのままシャークハンター……ではなく、シャークハンター後方の、フロアの壁に飛びついた。
およそ床から三メートルほどもある高さまで、息をするように張り付いて見せたツリーハウスの、恐るべきシャーク跳躍力だ！
さらにツリーハウスは跳躍。振り返ったシャークハンターに今度こそ攻撃……と見せかけ、左側面の壁に張り付く。
木から木へと飛び移る、ムササビめいたアクション。
「ぬうぅう……」
いつでもお前を攻撃できるぞ。
無言のプレッシャーが、ツリーハウスからにじみ出ていた。
「……」
ペースを乱すな。動きに惑わされるな。
シャークハンターの視線が、上下左右へと揺れる。
アノマロ・シュートで撃ち落とすべきか。
シャークハンターが反撃せんと右手を動かした直後、さらにツリーハウスは跳躍。

今度はどこへ跳ぶつもりか。
次の敵の動きを読もうとするシャークハンターに、
「ＳＱＵＲＡＫ！」
ツリーハウスの飛び蹴り！　高所からの重力も上乗せされた、鋭く重たい一撃だ！
並みのシャークノイドであれば、ツリーハウスのシャーク敏捷力に翻弄され、集中力が途切れ、首を蹴り折られていただろう。しかし、シャークハンターは忍耐強いサメであった。
防御は厳しいと判断した彼は、古代武術カンブリア殺法の技、エビゾリでこれを回避しようと試みる。
「ぐわあぁーッ！」
が、本末転倒！　カンブリアオーラの練成に気を取られたせいで反応が遅れ、跳び蹴りが胴体に命中！
吹き飛ぶシャークハンター。
「……よく生き延びたな」
遅れたとはいえ、エビゾリのために変換したカンブリアオーラが防御膜となってくれたらしい。
シャークハンターはまだ動ける状態であった。
「……ぐ……」
それでも、かつてサメを殺したと呼ばれる武器が一つ、極太の丸太で殴られたかのごときダクダクとした激痛が、彼の全身を侵す。
《……カッカッカ》
さらには痛みを増長させるかのように、内なる精神から声がささやきかけてきた。
《あれは齧歯樹上殺法の大技、キノボリ・トビゲリ。それに例の独特のシャウト。あれらはリス・シャークの特徴よ》
《イワシ……！》
こんな時にか。
《小手先の技に頼るから、あのような稚魚に後れを取るのだ。ヤツのシャーク因子は、実にリスの名が似合う小物》
笑うイワシ。
《我々ならば、簡単にヤツを狩れるというに……さあ、心のサメを受け入れろ》
《ダメなのだ、それでは》
《なぜだ？　貴様は苦戦を強いられているぞ？》
ズシリ、とイワシの言葉が、恥ずべき事実と共にのしかかる。
ツリーハウスの追い打ちが確認できたのは、それとほぼ同時であった。
樹上殺法の蹴り技、エダヘシオリ！　細腕であればガードの甲斐なく、そのまま手折ってしまう強力なキックだ！
危ういところであったが、近くのソファーを蹴り飛ばして、シャークハンターはこれを防ぐ。

攻撃どころではない。心のイワシを鎮めるのが先決だ。
《大層な口が利ける状態か？》
《お前に魂を売ってまで力におぼれようとは思わん》
ツリーハウスの攻めに対し、シャークハンターはツイン・チョップで拳の軌道を逸らし、迎撃。
《バカ！　それで死んだら元も子もないであろう！》
語気が荒れるイワシ。
当然、ツリーハウスはお構いなしに攻め立てる。
「ＳＱＵＲＡＫ！」
樹上殺法より放たれる連続リスパンチは、シャークハンターに息つく間を与えない。
「ぬうぅう！」
圧されている。
イワシのせいか？　それもあるかもしれない。
しかし、自身の古代武術カンブリア殺法の習熟度と、相手の齧歯樹上殺法の習熟度。ここに隔たりがあることもたしかだ。
ストイックに技を振るってくるツリーハウスからは、たしかな腕前が見て取れる。
「ＳＱＵＲＡＫ！」
サメが縄張りを主張するかのような、ツリーハウスの樹上シャウト。
《ムリをせずともよい。お前は、ただ我々に体を預けてくれれば良いのだ》

そこへ心の片隅からジワジワと広がる、イワシの救いの手。
イワシ・シャークは強い。無尽蔵とも言うべき量のシャークオーラからくる、純粋な暴力でもって、敵を完膚なきまでに叩きのめし、この世から消滅させる。
海峙はヤツの強さを、文字通り肌で経験している。
「ＳＱＵＲＡＫ！」
あいつを顕現させれば、こうして齧歯樹上殺法を自分に浴びせるツリーハウスを、速やかに狩ることができるだろう。
サメは憎い。自分の大切なものを奪った怪物である。
それらを狩るために、戦いに身を投じている。
サメは狩る。
だが、それでも。
《……》
自分はたしかにシャークノイドとなった。つまり、人間ではない何かとなってしまった。
けれど。
人間性までは失いたくない。
イワシの差し伸べる手は、己を深淵（しんえん）に引きずり込もうとする、殺意のこもった偽りの救いの手。
《イワシになれ、海峙》
《――断る！》
強き意志でイワシの誘惑を跳ねのけたシャークハンタ

ーは、エビゾリでツリーハウスのマエバ・ナックルを回避！
「……？」
一瞬、シャークハンターの脳裏に驚きが突き抜けた。さながら、高速で空を翔けるハヤブサのように。
「……！」
エビゾリが、できた。
それも、シャークオーラを使いすぎた、ムダの多いエビゾリではない。
自身に流れるシャークオーラの中から、本当に必要な量だけを汲み取り、カンブリアオーラに練成。それを用いて的確に攻撃をかわした、理想的なエビゾリ。
それが、今、できた。
《……感謝するぞ、イワシ》
《ほう……？　とうとう体を渡す気になったか》
《そうではない。お前とのムダ話も、ムダではなかったということだ》
シャークハンター、清水海峙は生真面目な男だった。
本来、カンブリアオーラ練成は、習熟するまでは精神を落ち着かせ、なおかつ意識を集中させなければいけない所作である。
ところが、シャークハンターは生真面目であったがゆえ、逆に意識をオーラ練成に割きすぎていたのだ。
戦いのさなか、シャークハンターはツリーハウスの攻撃をさばきながらも、心のイワシを抑えるのにも終始しなければならなかった。
その「弛(ゆる)み」が、かえって功を奏した。
力みすぎた手では、持ったバケツを少しずつ傾けることなどできなかったのである。
意識を高めすぎてはならない。少し心に余裕を持たせる程度でちょうどよい。
わかってきたぞ。古代武術カンブリア殺法の根幹が。
《イワシ。俺はお前に飲まれる気はない》
《つまらんヤツよ》
《だが、お前のおかげであやつを狩れそうだ。そこで見ていろ》
《……フン》
宿主の確固たる言葉に嫌気がさしたのか、邪悪な同居人が静かになった。
「ＳＡＨＲＤＥＮＳ！」
アノマロ・シュートを放つ。当たりはしなかったが、牽制ができればそれで良い。
「ふぅー……」
一度呼吸し、精神を落ち着かせる時間が手に入れば。せっかく掴んだオーラ練成のコツだ。みすみす逃すことなどしない。
「行くぞ、ツリーハウス」
両サメの視線が交差する。

「……来い」
青銀のシャークノイドの様子が明らかに変わったことを、この時ツリーハウスは感じた。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
シャークハンターが左腕をひねりながら突き出す。
可視状態のカンブリアオーラが手刀を中心にして回転、パンチの威力は上昇！　これぞ古代武術カンブリア殺法の技が一つ、スクリュードライバー！
右足を一歩下げたツリーハウスは、シャーク瞬発力を駆使してバックラーを装着、渦巻きを受け流した。
バックラーを持ったまま、裏拳を仕掛けるツリーハウス。
これに備えるシャークハンターに、自信あり！
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
喝采！　二度目のエビゾリが決まった！
カンブリアオーラの流れを感じろ。海原を悠々（ゆうゆう）と漂う頂点捕食者、アノマロカリスのようなオーラを。
アノマロカリスは泳ぐときに気を張り詰めていない。それは、自身が強大な存在であることを知っているから。
古代武術カンブリア殺法は敬意を表すにふさわしき武術。カンブリアオーラを信じ、使いこなすのだ。
シャークハンターの精神は、ある種のゾーンに突入していた。
窮地におけるイワシとの直接的なコネクトが、シャークハンターに新たな扉を開けさせたのである。
それを指し示すかのように、見よ。シャークハンターの放ったアノマロ・シュートは、獲物を喰らわんとするアノマロカリスの形状を、より鮮明に形作っているではないか。
敵の急激な覚醒に、何があったのかと驚きを隠せないツリーハウス。それでも、彼が取り乱すことはなかった。
バックラーでカンブリアオーラ弾を受け流しつつ、ツリーハウスは高く跳躍。リス・シャーク由来のシャーク跳躍力を駆使した得意戦法である。
壁を足場とし、敵はジグザグに跳ぶ。まるで巨大なピンボールだ。
これはキノボリ・トビゲリの予備動作！　先ほどシャークハンターに大きなダメージを与えた技である！
「ＳＱＵＲＡＫ！」
ツリーハウスのシャウトがフロアに響く。
「同じ曲芸が二度も通用すると思うな」
それにもかかわらず、冷徹なシャークハンターの声色。
すでにエビゾリの準備はできているのだ。
「知ってるさ」
だが……待て。
敵の狙いはシャークハンターではない、その少し手前のソファーだ！
キノボリ・トビゲリの威力は絶妙な加減を施されてい

た。ソファーはキックで粉みじんになることなく、質量の塊となってシャークハンターに襲い掛かる。
　驚愕！　これぞ地形を生かした匠の技！
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
　そうは言っても、回避対象が蹴りだろうがソファーだろうが、やることは変わらない。
　なんと本日三度目、理想のエビゾリが決まった。
「！」
　直後、ソファーの影からツリーハウスの姿が現れる。
　フェイントを交えた、恐るべき二段攻撃であった。
「ＳＱＵＲＡＫ！」
　齧歯樹上殺法が一の技、マエバ・ナックルがシャークハンターにヒット！
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
　ダメージを受けたとはいえ、シャークハンターも負けてはいなかった。
　カンブリアシャウトを合わせたツイン・チョップで反撃するシャークハンター！
　ここにきて両者の近接戦が拮抗した。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
「ＳＱＵＲＡＫ！」
　かつて同族とも熾烈な縄張り争いを繰り広げたサメは、お互いに名乗りを上げ、天までとどろく咆哮と共に、血と汗とフカヒレにまみれた激闘を重ねたという。

　今の二人を見れば、太古のサメ対サメの恐怖がリフレインされることだろう。
「サメエエエエ！」
　一般人がこの壮絶な戦いを目撃すれば、かような悲鳴を上げ、失神することは必至だ。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
　シャークハンターは左腕にカンブリアオーラを溜め、近距離アノマロ・シュート！
　拳に直接カンブリアオーラを乗せるツイン・チョップやスクリュードライバーよりも威力は劣るが、この技を使ったのにはわけがある。
「ＳＱＵＲＡＫ！」
　足元めがけて放たれたエネルギーを、ツリーハウスはシャーク敏捷力で回避。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
　さらに続けて右腕でアノマロ・シュート！
　こちらも目標はツリーハウスの足元だ！
　足元の危機を察知したツリーハウスが回避。代わりにシャークハンターの攻撃を二発も受けたビルの床にヒビが入り、床材の破片が飛び散る。
　一方、ツリーハウスはまったくの無傷ではあった。
　この攻撃を避け、反撃を見舞ってやろうと、ツリーハウスはリスのごとき俊敏さで回避。
「ＳＱＵＲＡＫ！」

その方法は跳躍。鍛えた樹上殺法特有の、半ば条件反射の回避であった。
その時。シャークハンターの目が、青銀に光った。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
跳びあがったツリーハウスのみぞおちに、シャークハンターの拳がめり込む！
シャークハンターはツリーハウスをよく観察していた。ヤツは身軽だ。なおかつ、跳びあがってからの戦術の組み立てが巧みである。
瞬く間に跳びあがったツリーハウスを追うのは愚策。アノマロ・シュートでスナイプすることも困難だ。
では、跳びあがる瞬間を狙えるのであればどうか？
シャークハンターはアノマロ・シュートを、ツリーハウスの動きを制限することに利用した。足元を攻撃すれば、相手は反射的に跳びあがると踏んだのだ。
自分の予測通りの行動を取るならば、その行動に合わせて攻撃を置いておけばよい。
これがツリーハウスのスピードに対抗するための、シャークハンターのシャーク判断力！
地面に降り立ち、防御の構えを取ろうとするツリーハウスを逃がしてはいけない。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
まだ地に足をつけていないツリーハウスに、シャークハンターのツイン・チョップ！

とっさにバックラーで受け止めるツリーハウスだが、チョップのパワーを殺せず、半ば無防備に宙を舞う。
ここで狩りきる！
右腕にカンブリアオーラを集中させるシャークハンター。そのオーラは魚群のようであった。
青銀に光るシャークハンターの右腕から、莫大なシャークオーラを感じる……！
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
なんとか両の足から着地せしめたツリーハウスに放たれるは、バージェス動物群を喰らいつくす最強生物、アノマロカリスのごとき絶大な一撃！
「単にぶっ放すだけなら、割と簡単な攻撃だ。だが忘れるなよ。こいつは古代武術カンブリア殺法の必殺技。お前が未熟な時に使えば、カンブリアオーラの使い過ぎで即座に意識不明になるからな」
師匠である冨士宮甲呀（ふじみやこうが）に忠告され、意識的に封印していた技、カンブリア・エクスプロージョン。
実戦で初めて扱ったこの技であったが、しかしながら最高の決め手となった。
「がああぁぁぁああッ！」
リス・シャークのシャーク敏捷力をもってしても、このタイミングからでは必殺の古代奥義をかわしきれない。
カンブリア・エクスプロージョンに胴体を貫かれ、恐ろしき悲鳴を上げるツリーハウス。

「ＳＨＡＡＡＡＲ……！」
ツリーハウスは、アンモニア臭を立ち昇らせながら消滅した。

Ⅳ

ツリーハウスを狩った後、数秒、油断なく周囲を見回していたシャークハンター。
が、
「……ハァッ、ハァッ」
ベタリ、と息を荒げてへたり込んだ。
ギリギリの戦いであった。あの土壇場で放ったカンブリア・エクスプロージョンが完璧に刺さったのも、大博打に勝ったに過ぎない。
戦いの最中でカンブリア殺法を使いこなし始めたシャークハンターであったが、それでもミスなくカンブリアオーラをやりくりできているわけではなかった。
長期戦に持ち込まれると、こちらのシャークオーラが先に尽きる。
そう判断したシャークハンターは、早期に決着をつけるべく、最大火力のカンブリア・エクスプロージョンを使ったのである。
《今回はマグレで勝利したようだな、海峙》
戦いが終わり、イワシが語りかけてきた。
《……たしかに、お前の言うことは正しい》
もし、カンブリア・エクスプロージョンを外していたら？　あるいは、カンブリア・エクスプロージョンをよけられていたら？
その時は、死ぬのはシャークオーラの尽きた自分だっただろう。
《ずいぶんすなおよな》
《事実は甘んじて受け入れる》
《そのくらいすなおに、我々に体を預けてくれればよいものを》
《黙れイワシ》
省みなければならないことの多い戦闘だったが、得たものもまた大きい。
《かような稚魚に苦戦しているようでは、すべてのサメを狩ることなど夢のまた夢だぞ》
《わかっている。だから、一層自己を高める必要がある。古代武術カンブリア殺法を、より深く修めるのだ》
《回りくどい。イワシになれ》
《断る》

サメを狩る。
イワシ・シャークではなく、清水海峙として。
それが、シャークハンターの戦い続ける意味であった。